

末黒野

すぐるの



3月号
(通巻895号)

喜寿

森清堯

装ひの勢ひ残し冬紅葉
浜の日に色仕上げたり石路の花
鎌たたみ枯蠓螂のかしこまり
喜寿の杯干して勤労感謝の日
花八手朝の気緊まる寺の磴
白山茶花旧家の庭の屋敷神
鳥声に落葉踏む音あはせけり
沈みゆく眼下の蕓冬の霧
流れ江の傾く白帆蜜柑山
スマホもてルーペ代りや冬木の芽
ポインセチア原色増ゆる居間となり
密避くる間延びの列や年の市

瑞声

木の葉雨

黒滝志麻子

(顧問)

小春日や灰吹きを置く骨董屋
枯蠓螂おのれの音に身構へる
言ひたくて言はず大根煮てをりぬ
朴落葉ひらりと風をかはしけり
冬蝶のふつとよぎりぬ水明り
道ゆづり譲られもして木の葉雨
枯菊のなほ残る香を束ねけり
樟脳の泌みこみ吊るすインバネス

甲矢集

配列は音順（月毎の循環）



冬の蝶

森清信子

薄くれなゐの切株香り冬ぬくし
保育士と散歩の笑顔小六月
ためらひを見せつつ凜と帰り花
石に影落として消えぬ冬の蝶
玻璃震はすバツハの楽や冬薔薇
僧坊に谷戸風まとも干大根
身の程の暮しまづまづおでん酒
潔き百歳の死や竜の玉
旧姓の通帳と印ちやんちやんこ
外廊下にシチューの匂ひ冬夕焼

冬の薔薇

石黒興兵

つつましき余生の如し冬の薔薇
磯釣の外道ばかりや浜小春
庭師来てたちまち終はる冬構
鉛色の廊を渡りて牡丹鍋
晩年は好好爺とぞ菊手入れ
採石の発破のしきり山眠る
乗られしは雲か風かや神の旅
湯たんぽを足で引き寄せ風の夜は
恵那峡の風鳴りやまず雪催
手術痕なでて長めの冬至風呂

石のこゑ

岡野里子

古民家の振り時計や文化の日
石に坐し石のこゑ聞く枯野かな
池の面へ日差しの弾け冬紅葉
一木の竜馬の像や竜の玉
語り部のお吉哀史や冬椿
月の出のひかりを集め枯芒
冬暁や明星捜す三千夫師忌
時雨忌や離れば寄れる檻の猿
古民家や樹々の影置く白障子
冬菊の日差を束ね香を束ね

木の葉髪

菅野日出子

ペット屋の猫ぬくぬくと冬はじめ
疫病禍を恐れぬ人出街小春
ぼけ封じ願ふ拝殿神の留守
幸うすき娘と囲むおでん鍋
忘れたきことはわすれず木の葉髪
古民家や丈不揃ひの吊し柿
カレンダー剥ぐや事なく師走来る
着ぶくれて友待つ渋谷迷ひけり
広島の訛を添へて牡蠣とどく
認知症おそれて一人日向ぼこ

戦死てふ

田中臥石

車窓より上総の峡の紅葉狩
峡路往く妻の運転暖房車
兄のこゑ冬の霞ヶ浦よりす
戦死てふ兄の名を呼ぶ冬の雲
爆死せる輪廻の兄や蓮枯るる
故郷は雪とや自粛の疫籠り
望郷のところに響く雪便り
雲圧す上総低山雪越さず
歩けなくなる膝痛や師走来る
餅食べて夫婦相病みぬたりけり

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



切り干し

岡田史女

山の水引ける小流れ枯蓮
一人来てまた一人来て囲炉裏端
冬もみぢ散りしく三千夫師の墓前
三千夫師と陽路師の墓所冬ぬくし
木枯や口遊びたるケセラセラ
悦惚と温もりまとふ冬至風呂
足元に猫の来てをり日向ぼこ

神の留守

太田良一

スコッチ

小田嶋野笛

時雨忌や嵯峨野を包む夕日影
橋叩き山へ走れり初時雨
神社へと浦賀の渡し神の留守
神在りの出雲は遠し旅心
攻め上る天守への道帰り花
着ぶくれて漢の作る玉子焼
釣針と浮子置く棚や年惜しむ

風に立つ獅子でありたし木の葉髪
冬日差す一人の部屋の奥の奥
湯奴の踊る土鍋や独りの夜
スコッチの一杯に脱ぐ冬羽織
厚着して収むる骨や匂ひ無く
冬ざるる谷の焼場や薄日さし
浮いてゐて流されもせず星羽白

冬 蝶 加藤静江

古民家の日差しやはらぎ神無月
冬蝶の溶け入る様や草の上
茅葺きの東屋ほのと白障子
堰音のかるき山里小六月
黄昏るる枯野の果や富士黒く
三門の空の淡さや冬桜
天を突く銀色の冬芽かな

西伊豆 齊藤マキ子

ひと時雨ありて明るし土肥港
小春風光の帯を引く漁船
網を干す庭のつづきの蜜柑山
軒先に魚籠吊るしある小春かな
花石路のしがみつく岩波しぶき
舞ひ上がるやうに落ちけり散紅葉
前山も背山も蜜柑通過駅

溪紅葉 堺昌子

もも色に芒の原や朝ぼらけ
友禅の模様染まり溪紅葉
八方の名残りの紅葉惜しみけり
冬もみぢ集めて淵の緋絨緞
枯れ残る芒の原や夕茜
くれなゐの散らすに惜しき冬紅葉
せせらぎに沿ひ白々と冬桜

冬 椿 高木邦雄

大枯野貫く流れ夕日影
尖塔の白き教会冬薔薇
地鎮祭更地に残る冬椿
昨夜の霜残る青菜の滴かな
斧音の高き村里年木積む
目葉をさせば嚏の朝かな
小春日や鐘の音高き蔵の街

雁の棹 長尾タイ

碧天を一棹の雁渡りけり
畳屋の新藁匂ふ腕捌き
古民家の火種絶さず櫓明り
枯葦や池に響けり樋の音
中洲への小さき反り橋石路の花
三猿の石碑のポーズ冬ざる
五年後の達者を願ひ日記買ふ

五百重波 大川畔美

金色を空へ展げて冬紅葉
ミルフィーユめきて落葉の石畳
冬ざれや海石の崩す五百重波
帆を畳むマストのやうや冬木立
ひと枝を杖に山路や落葉道
冬木立日の斑踏みつつ尾根の道
陣取られ特等席の炬燵猫

日向ぼこ 今村千年

先客に猫の来てゐる日向ぼこ
幼子とろばに跨り小春空
籠りゐて庭に親しき寒雀
考倣ひ伏見の酒と干鱈もて
碧天や綿虫の舞ふ深大寺
手袋を脱ぎて別れを惜しみけり
煤逃や男固まる喫茶店



青炎集

森清 堯選

横浜 布施由岐子

彼岸花の葉を確かめむ冬の道
冬ぬくし筋交ひの座の写経堂
上り坂美しき落葉を拾ひつ
小雪の心細きを震度3
大噓連射のあとの武者震ひ
冬三日月のひつかけてある星ひとつ

横浜 神谷さうび

横浜 山口郁子

ポランティアの守る里山冬ぬくし
小流れと知る水音や冬うらら
裸木や威容を誇る仁王立ち
枯芒なびくや光撒き散らし
怠りなき見張りのをるや浮寝鳥
鳥声の姦しきかな山眠る

友の来て愚痴温め合ふ炬燵かな
籠もり居のくらしに見合ふ年用意
庭木戸のささくれ目立つ冬早
遠富士に侍る山々眠りたり
湯の香満ち五体ほぐるる柚子湯かな
出迎への椿一輪女坂

三鷹 小林清彦

横浜 和田慈子

愚直なるマスクに託す世過ぎかな
ひつそりと煩雑よそに冬桜
隙間風換気要らずの夫婦仲
パドックの襪褌の始末や暮易し
黙々と土鍋囲むや冬の卓
筆止めて声懐かしみ賀状書く

霧晴れて貴婦人といふ白樺
黄落を抜けて原野の入植碑
牧閉すにれかむ牛の息遣ひ
電飾のいよよ華やぎ暮早し
年惜しむ町の明りを遠く見て
豊屋の営業電話暮早し

目黒 五十嵐貴子

狭山 沼崎千枝

うりばうの横穴探るやんちやかな
重きもの捨てなむ老いの冬構
熱爛は手酌構はず納めの座
冬木立小枝の影の迷路めき
冬草や取柄は我慢強きこと
歓喜の歌聴きつつ籠もる師走かな

神無月の予防注射や青き空
小春空友はホスピス選びけり
秩父より雨雲来り翁の忌
水槽を指すと集まる魚や冬
大根や煮る干す卸す漬くるべく
高き畝崩さぬやうに葱抜かむ

横浜 山口登

川崎 平澤侃

なにげなく引くや連なる烏瓜
踏石をドラムに変へて黄鶺鴒
気兼ねなき馴染の店やふぐと汁
冬の靄筑波山麓埋め尽くし
人影の絶えて社の冬ぬくし
疫病禍の防人となれ隙間風

もどかしき軀幹勤労感謝の日
山茶花や指が道具と陶芸家
無防備に猫睡りたる小春かな
おはやうの黄色い声や落葉蹴り
落葉掃くついでに留守の右隣
将もなき親子の会話冬茜

横浜 伊藤由良

横須賀 福田禎子

金秋の野山恋ひけり疫病なか
ありなしの風に応ふや枯尾花
賜はりし空也最中や日向ぼこ
失せものは目の前にあり暮早し
石路の花備前の壺に適ひけり
葉隠れの白侘助や仄青く

銀杏散る川の流れの水の綺羅
差潮の川面彩り散紅葉
伝説の洞の観音石路の花
磯千鳥発ちては返る潮だまり
冬^の海白帆一つに繋まる紺
山裾の崖の観音水仙花

耕 土 集

岡野 里子



秋晴や検診終へて握り飯
銀杏散り団地の小道隠しけり
靴音の他無き夜道そぞろ寒
秋の夜や遺影の父と齡並ぶ
いにしへの街灯暗し日短し

横浜 和田 啓

家路への坂ゆるゆると小六月
散歩して心やはらぎ冬至粥
蒼穹へ届かず二個の木守柿
冬の蚊の音なき影やふはふはり
玻璃窓の朝の気に覚め冬深し

横浜 白居 澄子

山眠る角のかたちの電波塔
駅へ向け踏みて造りぬ冬野道
日当りの木の頂や冬の蝶
街道の深き庇や大根干す
捨て台詞落とし峙へ寒鴉

印西 大坂 正

石塀に免るる紅やこぼれ萩
姉逝きて加はる墓誌や秋の虹
外房を走る単線刈田風
街灯の淡き光や秋さびし
電飾や心ときめく冬の暮

横浜 杉山くみ子

夕日めく丸き箒木紅葉かな
点さるる橋の欄干冬銀河
稜線のあらはとなりぬ枯木立
初雪の峰を仰ぐや露天風呂
朝食のテラス華やぐ返り花

横浜 津野 桂子

石段に彩とりどりの落葉かな
色づく葉夕日に映ゆる冬の川
久々に書くふみ長し冬初め
ランタンの連なる街や年の暮
古傷の疾く夕べや室の花

横浜 玉川 利江

宅配の息急ぐ道の師走かな
考妣の地へ旅立つ兄や冬の雨
一人鍋足腰過ぐる隙間風
電飾の青を際立て冬夕焼
焼芋を包む英字紙皿秤

横浜 佐藤 勝代

荒れ庭の一輪匂ふ黄菊かな
一房の重みや決むる葡萄狩
もろこしを焼くや醤油の香り立て
一粒を口づけめきて葡萄食ぶ
理髪店の合せ鏡やレモンの香

横浜 森竹 治郎

遺句集に男のロマン冬銀河
えやみ鬱路傍の石の霜の声
語り継ぐ家系の重み冬落暉
クッションの膨らむ窓や冬うらら
今朝の冬手荒れの指の打つまホ

横浜 岩崎 藍

晴れ上り風静かなる帰燕かな
てらてらと夕日止めぬ熟る柿
ドラキュラの目覚めの時や今日の月
綿虫の漂ふ朝の静けさよ
鳥に似る常盤木落葉枝はなる

横浜 宮崎 浩美

紅葉散る登る江戸城天守跡
作業場の電灯揺るる夜業かな
信州の連山黒しりんご挽ぐ
しぐるるや暖簾下せる料理茶屋
をみなごの抜けたる前歯千歳飴

横浜 松川 昌義

古民家の弓場の空や赤とんぼ
里日和縁に一例漬菜干す
遠くなる平らかなる日大根焚く
尺余なる大根抱ふる幼女かな
冷ゆる日や常の手洗ひ念入りに

横浜 与田 幸江

子犬にもおもちや与ふる聖夜かな
鶴見川中州に憩ふ百合かもめ
毛糸玉子へ初めてのミトン編む
湯たんぼや長患ひの腰にあて
ステイホーム健康機具の影冴ゆる

横浜 佐々木澄子

街川に映る黄葉や倉庫街
夕暮や自然薯負ひし考のこと
トラックに彩のあふれぬ室の花
次々に水輪を残し鳩潜る
木枯や樹々の梢の宵の月

横浜 秋山 文子